

尾島菊子「蚊ばしら」翻刻・紹介

—『台湾愛国婦人』掲載小説—

下岡友加

【キーワード】尾島菊子、小寺菊子、台湾愛国婦人、大正文学、女性作家

尾島（小寺）菊子（一八七九—一九五六）は、「大正期を代表する女性作家として、田村俊子、水野仙子と並び称された存在」（小林裕子¹）である。近年、金子幸代による編集・解説『小寺菊子作品集』全三巻（桂書房、二〇一四・二）が刊行され、研究の基礎的資料が整備されつつある。本稿がとりあげる「蚊ばしら」（『台湾愛国婦人』第60巻、大2・11）は、その『小寺菊子作品集』に付された「小寺菊子の年代別新聞雑誌掲載作品一覧」²に未掲載の小説である。この「作品一覧」では『台湾愛国婦人』掲載の菊子作品は三巻分五作品とされているが、平成25年度國學院大學大学院特定課題研究報告書『『台湾愛国婦人』の研究 本文翻刻篇』（研究代表者・上田正行、二〇一四・二）「作者別作品索引」が示す通り、『台湾愛国婦人』に掲載された尾島菊子の作品は選者としての活動を除いても、十三巻分七作品にのぼる。詳細は次の通りである。

- | | |
|-------------|-----------------------------|
| 第41巻（明45・4） | 「春の化粧法」「移転の記」 |
| 第42巻（明45・5） | 「流行の衣装」、小説「黄昏」、小品文選 |
| 第52巻（大2・5） | 附録小説「幼きころ」前篇1～10 |
| 第54巻（大2・7） | 附録小説「幼きころ」前篇15～19（前篇終） |
| 第60巻（大2・11） | 「回顧五年」、小説「蚊ばしら」、小品文選 |
| 第61巻（大2・12） | 附録小説「幼きころ」中篇11～15 |
| 第62巻（大3・2） | 小品文選 |
| 第63巻（大3・2） | 附録小説「幼きころ」中篇16～19 |
| 第64巻（大3・3） | 附録小説「幼きころ」中篇20～23（中篇終）、小品文選 |
| 第66巻（大3・5） | 附録小説「幼きころ」後篇1～3、短文選 |
| 第67巻（大3・6） | 附録小説「幼きころ」後篇4～6、短文選 |
| 第68巻（大3・7） | 附録小説「幼きころ」後篇7～9、短文選 |
| 第70巻（大3・9） | 附録小説「幼きころ」後篇10～12 |

第71巻（大3・10）短文選

第73巻（大3・12）附録小説「幼きころ」後篇13～15（終）

右に加えて稿者は、第40巻（明45・3）に菊子の小説「親子」が掲載されていることを財団法人半線文教基金会台湾文化資料館館長・劉峰松氏所蔵資料により確認済みである。³また、前後の雑誌から、未発見の第53巻（大2・6）に附録小説「幼きころ」前篇11～14章が、さらに第56、57、58、59巻のいずれかに同小説中篇1～10章が掲載（分載）されていることが明らかであり、少なくとも十六卷分八作品の菊子の寄稿があることが現段階で分かっている。三浦穂高が述べるように、菊子は『台湾愛国婦人』の「雑誌後半期の掲載常連者」⁴と云うべき作家である。

特に彼女の長編小説「幼きころ」の一年以上に及ぶ断続的連載は発表当時から耳目をひいたようである。雑誌の寄稿者でもある博文館理事・坪谷水哉は「読者を繋ぐ為に数号に連なる面白き読物一篇あるは宜しきも、近頃の如く徳田秋声、尾島菊子二氏の小説の何れも長く続くことは亦一考を要すべし」（『台湾愛国婦人』第63巻「本誌に対する緒名家の感想」大3・2）と苦言を呈しているが、⁵一方では「近頃台湾愛国婦人雑誌中で先づ読者の目を引くのは尾島菊子の幼き頃の記事ならん徒らに虚栄を夢み非道に誘惑されんとしつ、ある浦若き婦女子に是非一読させたきものなり（女の母）」（『台湾日日新報』大3・6・29、第五面）という新聞記事も確認できる。

『台湾愛国婦人』自体が全88巻中52冊しか確認されていない資料のため、小説本文すべてを読むことのできない現状であるが、「女の母」が述べるように「幼きころ」は様々な困難に見舞われながらも自活の道を得るべく奮闘した女性の半生記であり、菊子の代表作と位置づけられる力作である。⁶未発見の雑誌探査が必須の課題であるが、本稿では第60巻掲載の菊子の小説「蚊ばしら」を翻刻し、今後の研究に広く資することとしたい。⁷

「蚊ばしら」は全八章から成る。登場人物はお道・およし・お妙の三姉妹である。三者三様に生きる姉妹であるが、いずれも不幸や不満を抱えており、総じて女性の生きがたさが浮き彫りとなる小説の構図となっている。具体的に言えば、長女のお道は出入りの大工と関係して親に放逐されるような形で結婚したものの、現在は子だくさんで生活苦に喘ぎ、次女に繰り返しお金を無心している。次女のおよしも最初の夫と死別し、周囲のすすめにより再婚するも失敗。離縁されて二三年後には自分の生んだ一人娘も亡くなり、婚家から養育費として渡されたお金は姉と妹に消費されてしまう。三女のお妙は日本橋の西洋料理屋へ奉公し、派手な流行の装いをこらしており、「人の女房なんかになって、台所にはばかり燻ぶつてゐるのは堪らない」と独身でいることを主張するが、「どうせ私達の相手は分り切つてゐる」（五章）と将来への不安は隠せない。

長女は世帯の苦勞からか妹たちへも険のある態度に終始しており、次女は地味で内気、三女は派手好きで才気ありと、やや紋切り

型の性格の書き分けがある。また、姉妹三人による相互批評がそれぞれの立場をあぶり出してニヒリスティックな様相を呈している。

三女が長女に対して「お互に惚れ合つて、好き自由に夫婦になつた女の行末も、こんな惨目な結果に終るのだらうか」（八章）と痛々しい感情を抱くのに対し、逆に長女は三女に「今に見るが可い。ふん、あんなベタ／＼した服装なんかしやがつて、悪い疾病にでも罹るが落だらうに」（八章）といった悪態をつく。さらに次女が三女に「此妹の派手好きを見るたんび、ひどく反感が起つたりする」（四章）のに対し、三女の方は次女に「女と生れて、男の一人や二人を相手にしないでゐるなんて、腑甲斐ない」（五章）、「御先祖様がどうだとか、そんな自分の一生と何の交渉もない、因襲的な習慣にこだはつて、一人で齷齪してゐる姉が気の毒」（六章）と思つてゐる。三姉妹に共通する女性の不自由な生き様は、長女が口にする「女は全くつまらないもんだよ。どうせ男に依らなきゃ立つてゆけない」（八章）というセリフに集約されている。

金子幸代の調査に拠れば、「作品総数は五八〇以上にのぼる」という尾島菊子は相当な多筆の作家であり、それゆえに構成面での不備、いわゆる尻切れトンボとなつてゐる作品も少なからず存する。「蚊ばしら」も例外ではなく、小説末尾で次女のおよしが「淵川に身を沈めてしまひたい」理由は明確にされぬまま、テキストは閉じられる。小説が省略している時間に、およしが姉の子である武雄を貰ひ上げることを申し出て拒否されたという出来事が発生した可能

性も想定されるが、死を考えるまでのおよしの悲観ぶりは唐突な印象を拭えない。また、タイトルでもある「蚊ばしら」の担う意味も不明である。ただし、三姉妹のなかでも「新しい女」として生きることからはほど遠く、姉の子を養育して家の存続を図ろうとする古風な女性、「弱い女」（二章）である次女に小説冒頭から多く焦点化し、その心境を細やかに語つてゐる点に新味があると言えよう。家制度や親、因襲的な慣習の存続する故郷への反発や嫌悪を描くことの多い菊子の小説にあつて、逆の価値観を持つ女主人公の設定であり、菊子の創作の幅を知らしめる一篇と位置づけられる。なお、小説本文の翻刻にあたり、漢字は新字体に統一し、ルビは省略、明らかな脱字については補つたことを断つておく。

【翻刻】蚊ばしら

一

尾島菊子

およしはいつも夕暮時に感ずるうら悲しい思ひが、胸一杯に漲り渡るのをかんじながら、いつまでも窓際からはなれやうとしなかつた。そのかなしい思ひの中にも、一種云はれぬ甘い気分の混つたのを、ちつとはぐくんでゐるかのやうに、細い、しなやかな手で胸を掻き抱くやうにして、潤んだ眼を庭の面にそ、いでゐる。いつの間にか、庭の隅や、木の陰から湧いて来る夕闇が、かうして見てゐる中にも、そこら中に広がつてゆくやうで、物の差別や、色彩なども、

只一色の淡墨色に塗抹られて、消えてゆくのであった。

打水の後の名残りが、どこかで時々ぼたり、ぼたりと雫の音がする。そんな微かなものまでが、遠い街から起つて来る騒音にも消されないで、はつきりと聞えるほど、およしの心は清らかに澄んで哀れみに浸つてゐる神経に響くのであった。

『今日も、これで暮れてしまつたのだ。』

さう云ふ侘しい思ひが、昨日と同じやうに、つひ胸端に込み上つて来る。さうして何を見るときもなく、一つ所に眸をすゑて、やがて涙が滲み出るほど、暗いところを贖めてゐた。

前の二階建の家の陰になつた、ホンの名ばかりの庭の面は、闇と云ふ液体がたまつてゆくやうに、もう何も見透かされなかつた。それでもまだ空には薄い光りが漂つて、紫陽花の大きな花卉だけが、曙の空の色のやうに、くつきりと浮き上つて見えた。それが何ともいへず、およしの眼に快く感じられた。その色を見てゐる中に、だん／＼と暗に暈されてゆくのが哀れであつた。

およしは灯もつけなくて、ぼつ然と暗い室の中に物を考へてゐた。こんな淋しい心持を好むやうになつてから、もう幾年かになるのである。さうして光明のある思ひも打ち消され。若やいだ心の中に芽ぐんださまざまの情の芽生も、悉くつみとられたやうに、たゞ溜息ばかりの多い生活には、おぼろげな夢の跡を追ふやうな過去の思ひ出が、僅ばかりの潤ひと慰めとを与へるに過なかつた。

まだ三十三と云ふ年増ざかりを、世の中の歓楽に眼を向けなくて、

何の張合もない空虚な月と日を重ねてゆく我身の生涯を思ふと、あきらめの好い、素直な性質のおよしも、時にはつまらないとか、やる瀬ないとか云ふ、焦々した、捨鉢な気分になつたりした。併しそんな昂つた感情も、すぐに熱のさめてゆくやうに冷えきつてしまつて、どうせ自分がかうした運命に囚はれてゐるのだと、悲しい諦めに落ちてゆくのであった。

三人の姉妹の中で、自分ばかりは氣質が好いとか、何でもよく出来るとか、纏緻も一番すぐれてゐるとか云はれて、十五六の時分から全く人の讃め者になつてゐた。けれども、結婚して間もなく、夫に死別した。さうして人に勧めらるゝ儘に再婚したが、十五も年が上であるばかりか、先妻が遺した三人の子供のために、散々な苦勞をした、其揚句に、自分の生んだ子供一人をつれて、到頭離縁になつてしまつたのである。

自分の生涯には、いつも幸福な日が／＼くやうに考えてゐた娘時代の水々しい心も、だん／＼失せて行つて、嘗め盡したあらゆる苦勞に寝果てた上、まだ可弱い幼な子供を抱へて、飄然世の中へ投り出された時は、荒れた野原を一人で駆け廻つてゐるやうな心細い思ひに、幾日も／＼泣いて暮した。さうして一人の子供に対する愛著の念に駆られては、弛みかける心を引立て引立てしながら、裁縫などして親子二人の生計を立て、ゐた。最も離縁になる時に、子供の養育費という名儀で何程か纏つた金を貰つたが、どうにか無事な日を送つたのは、僅二三年で、其中子供に死別してしまつた。さう

して少し持つてゐた金は残らず姉と妹のために消費せられてしまつたのである。

で、今は姉の子の武雄と云ふのを引取つて、侘しい暮しをしてゐる。一人の子を亡くしてからと云ふもの、余計に世の中を悲観して、自分などもう、何も生きてゐる必要もなければ、又要求もないと、屢々そんな事を考へたりしたが、武雄を育て、見ると、又なんとなく淋しい心にも楽しみな影がさして来て、出来るだけ武雄のためには盡してやりたいなどと考へ出した。そしてずん／＼と愛情が増すに従つて、もうすっかり自分の所有になつてしまつたやうな、誇らしい気分になつた。

まだ姉の方とは確とした約束もしてないのであるが、およしはいつそ自分の子にしてしまはうとさう心に定めてしまつて、近所の人達にもそんな話をしたりした。

けれど折角可愛がつて大きくしても、今に向ふの都合の好い頃に、素気なく取戻してもされやうものなら、何と云ふつまらないことだらうと、又絶望の太息を吐いて、ひどく悄気返る事が度々あつた。さうして姉に会つた時には、そんな話を定めてもらひたいなど、考へてゐながら、さて会つて見ると、自分の前途に何の望みもない女の身で男の子一人を立派に教育してゆけると云ふ確なものもないところから、つひ云ひ外れてしまふのであつた。

二

『私の一生ぐらゐ淋しいものがあらうか?』

およしは今も亦、武雄の事を心に繰り返してゐた。なんとかそれが定まらぬうちは、徒に空虚な生活を営んでゐるやうで、しつかりと心の緒を結びつけるもの、ない不安な怯えが、又しても弱い心を脅かすのであつた。

明日にでも姉を訪ねて、何方かに話を定めて来やう、とまで思ひつめる時は、おのづから感情が緊張して、生きなければならぬ、私だつて矢張り生きなければならぬと、何か意地づくで生きるかのやうに、自分の心に争つて見たりした。

『武ちゃんなの?』

慌立しく外から駈け込んで来た音をき、つけておよしはふと声をかけた。

『あゝ。』

武雄は足摺りをするやうにそつと家の中へ這入つた。

『叔母さん! どうして灯をつけないの? 真暗ぢやないか?』

不思議さうにさう云つて傍へ来た。

『武ちゃん、氣の毒だけれど、お前さんちよいとつけておくれよ。縁側の隅つこに洋燈があるの、知つてるでせう!』

物憂げに額に手をあてた儘、さう云ふと、

『あゝ。つけてあげるよ。』

十二になる少年は威勢よく答へて、飛ぶやうにドン／＼縁側に高

い響きを立て、出た。やがてマツチを擦るシヤツと云ふ音がして、暗がりに美しい灯の影がさした、と思つた時、ソヨ／＼吹き込む風に直ぐ掻き消されてしまった。武雄は大人のやうに舌打などして、二三度なほつゝいて揉つた。

『どうもありがたうよ。』

およしは洋燈の傍から現はれた少年の顔を、珍らしげに見やりながら、眸を潤ませた。

『叔母さんは体がだるくて、起つのも億劫なのよ。武ちゃんは毎日元気がよくつて、ほんとに何より結構だわね。』

かう云ひながら、武雄の手から洋燈を取つて、室の真中に下つてゐる自在に引掛けた。そして又長火鉢の前に、新しい淋し味でも喚び起すかのやうにして、ベタリと坐り込んでしまった。

『どうして、そんなにだるいの？』

武雄はおよしが凭れてゐる窓際へ行つて、闕に腰をかけながら、くる／＼した眸を睜つた。およしは答へやうもなくて黙つてゐた。外は真暗になつて、植込に渡る風のそよぎが、サラ／＼と葉と葉を鳴らしてゐた。

『ほんとにどうしてかう憐しいのだらうね。ひよつとしたら叔母さんは病気になるのかも知れない！』

およしは自分で自分をあはれむやうな声で、感傷的にさう云つた。

『いやだなあ叔母さん、病気になるかなつちや。』

ぶら下げた足をバタ／＼させて、心配らしく淋しい表情をした。

『叔母さんが病気になるよ、武ちゃんは心配になるの？ほんとに心配になるの？でも何でせう武ちゃんは自分のお母さんへ健康ならい、んでせう？』

わざとそんな事を云つて、無邪氣な子供心を試すやうにした。

『そんな事はないよ。ねえ叔母さん、叔母さんが病気になれば、僕矢張り心配になるんだもの。もうそんな話は止さうよね。』

およしは嬉しいやうな、又義理でそんな可憐らしい事を云はれてゐるやうな、こんがらがった思ひが胸一杯になつて、体の何処かを一寸押は、すぐ涙がこぼれて来さうな張つめた心持になつた。

『偽よ。叔母さんが病気になんかなりやしないよ。だけどね、若し万一叔母さんが病気になるやうなことがあつたら、武ちゃんは介抱してくれるかしら？』

およしは眼を伏せたまゝ、心細げに云ふのであつた。

武雄は少しはにかんだやうな、極りの悪さうな顔をして、黙つて首を垂れてしまった。およしがあまり真面目になつて、悲しさうな事ばかり云ふので、何と答へて好いか分らなくなつたのである。そして今夜に限つて、なぜこんなに哀れっぽい話をするのだらうと、武雄はまぢ／＼叔母の沈んだ面をながめてゐた。およしの眼に涙が光つて、唇が微にふるへてゐる。これを見ると、武雄は子供心に小さな胸が迫つて来るのであつた。

三

涙の多いおよしの、不仕合せな過ぎ去つた閨歴も知らなければ、現在の便りない、侘しい心持も分らぬ武雄に、なんでおよしの複雑した心の悲哀を洞察する事が出来やうか？武雄ばかりではない、周囲の人々は勿論、現在の肉親すらも、自分の此心に対して、少しの同情をも持たなかつた。およしは弱い女である。孤独の身を守つて、世の中のいろ／＼のいきさつに打突かつてゆくには、あまりに弱い心と、あまりに弱い体を持つてゐた。

『武ちゃん！』

およしは不意に改まつた調子で呼んで、頭を擡げた。

『なあに？』

武雄は返事をするのに、一寸迷つた。

『武ちゃんね、若しお母さんが叔母さんの子におなりつと云つたら、私の子になつてくれるの？』

武雄はその唐突な質問に対して、少なからず狼狽した。一体どうした訳なのだらう、変な事を訊く叔母さんぢやないか、と云ふ風に、きよろ／＼とおよしの方を見守つた。叔母の顔はひどく蒼ざめて、髪の毛がハラ／＼と頬にか、つてゐるのが、堪らなく淋しかった。

『え、どうなの？なつてくれるの？それともいやなの？』

『叔母さんの子になるつてのは、どう云ふ事をすればいいの？』

武雄はやがて口を切つたが、当惑らしい色を、顔中に漂はせてゐた。

『ホ、さうだつたね、武ちゃんにはまだ分らないわね。叔母さんの子になるつていうのはね、つまり叔母さんの家へ来てしまふ事なのよ。そしてお母さんの家へもう戻つてゆかないのよ。お母さんの家には、まだ信ちゃんもゐるし、お千代ちゃんもゐるし、ちつとも困らないんだからね。い、かい？武ちゃん！武ちゃんは叔母さんに育てられて、いつまでも、いつまでも叔母さんと一緒にゐてくれるかい？』

『あ、ゐるよ。いつまでも、叔母さんと一緒にゐるよ。』

『ほんとだね。武ちゃんが其気なら、叔母さんはどんなに嬉しくつて、心丈夫だか知れない。ではね。今度お母さんに会つた時に、その事を話すから、武雄そのつもりでゐて頂戴ね。』

およしは満足らしい微笑を含んで体を起しかけた。武雄は何が何だか薩張り分らぬながらも、さう云はれて見ると、急に不安な影が心の上に射して来たやうな気がして、眼をしばた、きしながら火鉢の傍へ摺りよつた。

『だけれどね、叔母さん、そんな事をしたら、家のお母さんに叱られやしないだらうか？』

と眉をひそめて、大人らしく首を曲げた。

『なぜ？そんな事がありやしないよ。どうせ武ちゃんは叔母さんの甥なんだもの。云は、子も同じなのよ。けれど一応はお母さんにようく其話をしませうね。』

『さう。』

武雄は少し安心したやうに、小さい息を吐いてゐた。

およしは今更新しい心持で武雄を見ると、自分の前途は此子に依つて運命づけられるのだ、と云ふ事を考へ出すと、死んだ女の兎の姿が、幻のやうに眼の前を遮つて来た。

『生きてゐるなら、今頃は可愛らしい盛りだのに。可哀さうなことをした。』

およしはやがて解けかゝつた心持を、又元の通りの暗い気分に入れさうになつた。けれど、現在自分の膝元に心配さうな眼を睜つて、ちよこなんと坐つてゐる武雄を見ると、もう堪らないほど懐かしくなつて、行成抱きメめて、熱い息を首筋に吹きかけた。

『ねえ武ちゃん、これからはしつかり勉強しておくれよ。そして立派な人間になつておくれよ。』

彼女は恋人の胸に我胸を押しつけたやうな、あた、かい感情に酔ひながら、しばらくは身動きもしなかつた。やがてけろりと乾燥いだ調子になつて快活に笑つたり、喋舌つたりした。

いつの間にか夏の夜は深けてゐた。武はふらり、ふらりと坐眠りをしてゐた。蚊の群が又しても押し寄せて来た。

『まあ、可哀想に、さあ寢床をしいてあげるよ。』

およしは思い出したやうに立つて、二人の蒲団を敷くと、古くなつた木綿蚊帳を吊つて隅の方を引張つてゐた。武雄は寢衣に著かへると、もうコソ／＼と中へ這入つて行つた。間もなく楽さうな寢息が蚊帳の中からもれた。夜は一層森として静まり返つた。

今夜は珍らしく隣りの内儀さんも遊びに來なかつた。およしは蚊に刺されながら、いつまでも、火鉢の前に悄然と物を考へてゐた。断片的に思ひ出さるゝ過去のいろ／＼の事実の中には、新婚当時の幸福に酔つてゐるやうな自分の初々しい姿が現はれたり、二度目のうるさい家庭に苦しんで、糞れ果てた自分のさびしい面影が浮んだりした。それもこれも、今からおもへば、人事のやうに考へられて、たゞ疲労に疲労を重ねた、氣だるい体ひとつが残つてゐた。これから先の運命は、此疲れ切つた、血の氣のない、自分の手によつて開拓されてゆくのだと思ふと、心もとない中にも、自由を得られると云ふ事が、何となく氣安かつた。

四

およしは裁板の前に坐つて仕事をしてゐると、脇の下からダラ／＼と汗が流れた。外の明るい日光に眼をやると、脳貧血でも起きさうに、ぐらぐらとしたりする。それでもするだけの仕事は矢張りしなければならなかつた。そして武雄が学校へ行つてゐる間は、一人ぼつ然として、室の中に坐つてゐた。身嗜みは好いのであるが、質味にしてゐるので、年よりはずつと老けて見ゆるのを、とき／＼鏡の前で情ながるやうなこともあつた。

午前に妹のお妙がふと訪ねて来た。派手な風をして、流行の洋傘などさして来た。別段案内も乞はず、黙つて這入つて来た時は、あんまり美しかつたので、およしは妹とは一寸思へなかつた。

『オヤ、妙ちやんなの！』

およしは何と云ふ訳でもなく、頬の色を染めた。

『姉さん、しばらく、御無沙汰したわね。』

物慣れた中に、媚のある挨拶振をして其処へ坐つた。内気なおよしは、此妹の派手好きを見るたんび、ひどく反感が起つたりするのであつた。

両親が死絶えて、一家を畳んでしまつてからは三人の姉妹も散々になつて、各自に思ひ／＼の道を辿つて行つた。本来ならば、姉のお道が家の後を継ぐべき筈だつたが、出入の大工の頭梁と馴れ染めて、深い関係になつたために、親から殆んど放逐されたやうな形で、二人は何処かで夫婦暮しをしてゐた。両親がつゞいて病死してから二三年経つと、それでどうやら家の闕だけは踏むことを許された。併し其以前からも姉妹同志はあまりしげ／＼往来しなかつたのである。

お妙は去年の春から、日本橋にある西洋料理屋へ奉公してゐる。愛嬌のある、可愛い女である上に、才気もあり、一体に派手すぎない、気のさく／＼とした性質なので、主人から重宝がられてゐるだけ、家の者などはちよい／＼真面目に注意する事があるが、てんで耳を貸さなかつた。いつも自分勝手におのみ振舞つてゐる。およしはそれが危つかしくおもはれて、ハラ／＼してゐるのであつた。そして洋食屋のやうな、客商売の家に女中をして、其日／＼を浮々と面白可笑しく暮してゐるのが、墮落のやうに考へられて、お妙の顔さへ見

ると、もう退つたらどうかと云ふのであつた。

お妙は笑つた。今の世にそんな旧弊なことを云つてゐるやうでは、姉さんの行末が思ひやられるとまで冷笑した。お妙の眼中には、最早やおよしの淋しい、影のうすい姿などないのであつた。それでも姉妹と云ふ強い親しみの或力に引附られて、根も葉もなく打解けてしまふのである。

『来やう来やうと思つてゐても、つひね、店が忙しいもんだから、どつきと日が経つちやつてね、知らず／＼御無沙汰になるのよ。』

お妙は能模様式の扇子を出して、ハタ／＼と脇に風を入れてゐた。

『い、え、私も一度行きたいと思つてゐるばかりでね。ほんとにお互に変りが必要ならば何よりですよ。すつかり夏支度が出来たのね。どうも大変のお衣装だこと。』

流行づくめの装ひをこらした妹の服装を、およしは初めて見たものの、やうにちろ／＼ながめた。扇子を使ふ手に、ピカ／＼とダイヤが光つてゐた。およしにはこれが新ダイヤとも何とも考慮することなく、さも異様にケバ／＼しく眼に映るばかりであつた。

お妙は少し得意らしくほ、ゑんで、

『い、え、支度つて、何も出来やしないのよ。安物でやつと胡麻化してゐるんだもの。中々ね、奉公ぐらゐしてゐちや、綺麗な著物なんか著られやしないわ。』

と矢張り不満足らしい語気を洩らしてゐた。

『妙ちやんは豪いね。全く甲斐性だよ。姉さんが始終、姉妹の中で

一番出世をするのは妙ちやんだらうつて云つてゐたが、実際さうだよ。今にどんなに好い処からお迎ひが来るかも知れないね。』

嫌味を云ふつもりでもなく、およしは心からさう感じたやうに云つた。

『その指環はいつ買ったの？』

『こんなもの、いやですよ。安物ぢやありませんか。冷かしぢやいけないわよ。』

蓮葉な声で、お妙はさう云うて、指環の手を片一方の掌でかくすやうにした。

『冷かすもんですか、私はそんな人の悪いぢやないぢやないの？』
却て自分の方が冷かされてゐるやうで、およしは興ざめ顔をした。

『だつて、こんなものを、そんなに仰々しく訊くもんじゃないわ。』

『でも、大変に立派なもの、やうだからさ。』

『そんなぢやないわ。』

秘密の箱にでもふれてゐるやうな、ともぐくに好奇心を光らしてゐたが、それでもいつか話は陽気に呶えてゐた。鬱陶しい事ばかり考へてゐるおよしの心が、少しづつ、明るい処へでも這入つてゆくやうに感ぜられたのである。

五

話の最中に、お妙は何か考へ事をはじめて、急にしんみりした調子になつた。

『そりやね、何もかもかまはないで、贅沢な服装をしゃうと思へば、私にだつて出来ない事はないんだけれどね。』

云ひ淀んで、唇にかすかなゆるぎを打たせてゐたが、又氣をかへて、

『この間もね、南洋で何だか大層大仕掛の貿易商をやるつて人が来て、いろんな話をするのよ。そしてやれ帯を買つてやるの、指環を注文してやるのつて……だけれどね、私は相手にもしなかつたわ。だつて其人間が、いけ好かないんだもの。いくら物がほしくたつて、そんな奴の機嫌なんか取るのは嫌だからね。』

と他所事のやうに語る中にも小鼻の上に誇らしげな色が動いてゐた。

『そんな事は余程用心しないといけないね。うっかりして、そんな人の口車に乗ると、どんな事になるか知れないよ。』

およしは眼を大きく睜つた。

『大丈夫よ。』

お妙は強い声になつた。

『私だつて、それ位の事は百も心得てゐてよ。そんな間抜けぢやないつもりなんだものね。』

と姉の怪訝な顔を睨みつけるやうにした。

『そりや、さうだらうけれど……』

およしは何か云ひつゞけやうとするのを、お妙は急いで打消した。
『もう止して頂戴！そんなつまらない話は止ませう。』

お妙は自分にも興味のある問題を、因循な姉の小さな型に容れて、窮屈な捌をされるのが腹立しくなるのであつた。そして心の中では、姉の事を、そんな狭い量見であるから、到底好い運が向いて来さうもないのだ。女と生れて、男の一人や二人を相手にしないのであるなんて、腑甲斐ないぢやないかと云ふ嘲けりを持つてゐるのであつた。

馬鹿正直な、くうたらなおよしには、お妙の心の中が読めなかつた。

『妙ちゃんは、私がか云ふとぢつき突掛るやうに云ふけれど、私だつて一人の妹だもの、心配になるから気の附いた事は云ふのよ。ねえ、悪う思はないで下さいよ。』

と早や涙ぐんでゐた。

『ほ、、、、、。』

お妙は絞り出したやうな笑ひ方をした。

『姉さんと話をしていると、私もう気がくさくしてしまふわ。もつと陽気になつたらどう！つまらない苦慮々々したつて成るやうにしかないぢやないの？』

行儀を崩して、お妙は畳に肘をついた。

『私はね、今度妙に会つたら話さうと思つてゐたんだが、全く姉さんや私が好い手本だからね。ほんとに考へなくつちやいけませんよ。姉さんだつて、お父さんやお母さんの云ふ事を背いてゐれば相当な家へ嫁附いて、今頃は幸福な月日を送つてゐられたんだもの、……』

一人々々の運命とは云ふもの、實際若い時が肝心ですよ。妙ちゃんだつて、もう二十五なんだからね、もうそろ／＼身を固める用心をしなきゃいけませんよ。女はいつまでも男のやうな訳にはゆかないんだから。』

しみぐ／＼とおよしは云ふのであつた。

『さう云えば、全く私も二十五だわね。』

と妙は女の年の征服を悔しがつた。

『身を固めるつて、結婚する事でせう、私は当分まだ独身であるわよ。人の女房なんかになつて、台所にはつかり燻つてゐるのは堪らないからね。どうせ私達の相手は分り切つてゐるんだもの。』

お妙はいつしか捨鉢な気分になつてゐた。

『最初は誰でも一寸そんな風に考へてゐるけれど、年をとつて見ると、いろ／＼思ひ当つて来るのよ。そりや結婚したつて、屹度幸福つて訳にや行かないわ、私のやうなのがあるからね。けれど、私なんかはほんとに別者だわ。こんな不仕合せな女ばかりあらうものなら、世の中暗だもの。』

『よしませう、止しませう。私も其中には又考へてよ。なあ一日でも暢氣に出来るだけはしなきゃね。つまらないから。』

お妙は紛らすやうに笑つてしまつた。およしも釣り込まれて、唇を歪めながら淋しい微笑を浮べた。

『まあ結構なお菓子ね、どうもご馳走さまよ。』

お妙の出した菓子折を見て、およしは嬉しさうに云つた。

やがて昼飯の支度に、およしは風呂敷を持って外へ出ていった。お妙は一人、コロリと横になつて、たゆげに扇子を使つてゐた。強い光線がだん／＼沁みひろがつて来て、狭い家の中が蒸されさうになつた。

六

二人で昼飯を済ましてから、お妙は帯を解いて伊達巻一つの涼しい姿になつた。自分のゐる洋食屋の内幕や、其処へ遊びに来る客の噂など、それからそれと話しはじめた。およしには、そんな話が凡て耳新らしく、珍らしい事柄ばかりであつた。自分の住んでゐる世界に、そんな愉快な、華かな、活々したところがあらうとは、迎も想像にもつかない位であつた。お妙が面白さうに身振りなどして、浮ずつた語調でそれを語つてゐるのを見てゐるだけでも、自然に心をそゝられて、一緒にそんな社会へ飛び込んで見たい気が起つたりするのである。

『姉さん！』

やがてお妙は、ちつと姉の見素ほらしい姿に眸をとめて、何か云ひ出さうとした。

『此間も御徒町の姉さんがさう云つてゐらつしつたんですがね、いつまでこんなにしてゐたつてつまらない事だし、まださう取た年でもないんだから、もう一度嫁つて見る気がないだらうかつて、ねえ姉さんどう？』

流石に極りわるさうにそんな事を云つた。

『真逆、いくら賭事見たいなもんだつて、もう一度嫁づいて見るなんて事は真平よ。私は亭主運が悪いんだから。幾度嫁つたつて到底好い亭主を持ってないのよ。さう思つて今ぢやすつかり諦めてしまつたの。』

およしはまだ諦めかねるやうな、心の悶えを秘すやうにして、わざと落著いてさう答えた。傍から親切にそんな話をしてくれても、今のおよしには、ちつとも有がたいとは感ぜられないのであつた。

『でも姉さんは心細いでせう。そんな気の弱い人がさ、此先どこまでも独身でやり通さうとするにや、随分苦労だらうと思ふわ。』

『どの道苦労するなら、私独身で苦労した方が、よつほど諦めがい、と思ふのよ。』

『それもさうだらうけれど、御徒町の姉さんの方には、何だか縁談がありさうな様子よ。』

『まあいやだ。そんな事よりかね、私は寧ろ武雄を私の子に貰ひうけたいと思つてるのよ。そして私はあの子に係つてゆかうかと考へてゐるの。それを御徒町へ相談に行くつもりなの。』

およしが生真面目にそんな話をするのを、お妙はクス／＼心で笑つて聴いてゐた。

『姉さんはほんとに婆さん染みた事を考へてゐらつしやるのね。あんな子供なんか貰ひ受けて、一体どうするの？これから一通りの学問をさす計りでも大変ぢやありませんか、馬鹿々々しい。およしな

さいよ。それにこんな事を云つては何だけれど、別に姉さんの後是非継がねばならぬと云ふ訳があるぢやなしさ、気楽な体に気楽でやつた方がそれだけ徳だわ。』

『だけれど、私達の生れた家つてもものは、何して今の処形なしなんだからね。私は御徒町の姉さんに代つて、武雄を育てながら、家の後を継がせうかと思ふのよ。さうすれば両親に対しても申訳が立つぢやないの。全体自分の家が断絶してゐても、誰も何とも云ひ出さないのは、随分不都合な訳だわ。自分さへ幸福なら、家の後なんか何でもいいと思つてゐちや、御先祖様に済まないわね。』

およしはブリ／＼してゐた。お妙は嘖き出しさうになつた。家の後がどうしたとか、御先祖様がどうだとか、そんな自分の一生と何の交渉もない、因襲的な習慣にこだはつて、一人で齷齪してゐる姉が気の毒のやうに感ぜられたのである。そして兎角およし自身が孝行顔をするのが小癢に触つた。

『姉さんの心掛は全く感心ね。迎も私等の考へられる問題ぢやないわ。まあ御徒町の姉さんともよく相談して御覧なさい。武雄を貰ふなんて、それは義兄さんの方で承諾しないだらうと思ふけれど……』

お妙は何かなし突放すやうに、冷やかな態度でさう云つた。

妙に白けた心持になつて、二人ともしばらく外方を向いて押し黙つてゐた。およしはどうせ誰も自分の身にほんたうの熱い同情を持つてくれる人はない、姉妹なんて、何と云ふ便りないもんだらうと、

頻りになさけない気がして為方がなかつた。そして、ぼたり、ぼたりと涙をこぼしてゐた。

お妙は勃然と起つて帯を締めはじめた。もう帰るのかと思ふと、およしはどうしても此儘妹を放したくはなかつた。

『もう帰る気なの？』

およしは寧ろ怨めしさうに振り仰いだ。

『え、。』

これも面白くない表情をして、暴にキユツ／＼強く帯を締めてゐた。

『今日は本当の処、私の出られる日ぢやなかつたんだけど、何だか急に姉さんに会ひたくなつたもんだから、やつと都合して出て来たのよ。』

声もなんとなく張合がぬけてゐた。

『よくね、そんなに気にかけてくれて……有りがたうよ。陰気

臭い話ばかりして済まなかつたわね。』

『い、え。』

お妙の眼にも涙があつた。

七

武雄が学校から帰つて来たら宜しくたのむと、隣家の細君に依頼して、およしはお妙とつれ立つて家を出た頃は、もう彼は四時に近かつた。折角出て来た序だから、御徒町まで廻らうと、お妙が云ひ

出したので、およしも急に行つて見なくなつたのである。

それにしてもお妙から今日の話を姉に持ち出されはすまいかと云ふ懸念があつた。自分の前でされるのなら、どんなにでも其場で弁解が出来るやうなもの、蔭でヒソ／＼叫ばれるやうだつたら、こんなにいやな事はないと思つた。一つは自分の心持を誤つて伝えられはしないかと、それを慮れたのであつた。併し一方には、話の間に万一機会があつたら、自分の方から進んで武雄の事を云ひ出して見やうかと云ふ積極的の心もあつた。

減多に外出した事のないおよしは、久しぶりで都の夏の明るい街へ出て見ると、人々の軽さうな潇洒な姿や、濃い緑を吹く柳の枝に薫る風そのよぎなどに、つひ恍然と氣を奪られて、電車に乗つても、田舎者のやうに、始終きよろ／＼してゐた。そしてお妙の物なれた、電車道などに委しい様子を見ると、羨ましいやうでもあり、小憎らしいやうでもあつた。

およしは電車の動揺に少し眼が眩んで来た。

『私ね、乗りつけないもんだから、眩暈がしさうでね。』

額を押へて、病人のやうな顔をしてゐるのを、お妙はあはれがるやうな優しい眼をして剽はつた。

やがて御徒町の停留場で二人は下りた。お妙の鼻の上に汗がぽち／＼浮いてゐた。細い横町へ曲つて、あまり家並のと、のはぬ街に、お道が住んでゐるのであつた。

総領の姉のお道は、乳児を抱いて、表の方の間にほんやり坐つて

ゐた。洗ひざらした浴衣を着て、髪も乱れてゐた。左の足を少し横にまげて、はだけた胸からあまり肉附のよくない浅黒の肌膚をさらけ出してゐるところは、如何にも貧乏らしくつて、どうしても裏長屋の内儀さんに見えた。若い頃からいろ／＼と求めて苦労した故もあらうが、眼の縁など薄く隈を取つて、疲労の跡があり／＼とよまれるのである。さうして険を含んだ眸が、ひや、かに光つてゐた。

『オヤ、お揃ひでまあ、よくお出掛けでしたね。ほんとに出しぬげぢやないか。』

お道は早速お妙の服装に眼を濺いだ。強い嫉妬の色が自然にあらはれてゐた。

一通りの挨拶をしてしまふと、およしはお妙から貰つた菓子折を、土産ものとして出したものだ。

『あら。』

お妙はつい迂闊してゐたので、チラとおよしの顔を見返つた。およしは極りわるさうにしてゐた。

『済みませぬね。』

お道は別段怪しむ訳もなく、それを受取つて、膝の上から乳児をおろした。幼児は黙つて畳の上で眠つてゐた。

『義兄さんはお留守？』

お妙はぢつと姉の顔を見た。ぢろ／＼とながめられるのが、さも辛さうに。

『あ、此頃は神田の方へ行つてゐるの、ちよつとした普請を引受

けたもんだから。』

あまり風通しのよくない、立込んだ住居なので、お妙は暑さうに其処等中を見廻してゐた。お道は汚ならしい番茶の道具を出したり、薄つぺらな、じとくした座蒲団を出したりした。幼児はいつか眼をさまして、クン／＼鼻を鳴らしはじめた。

『オ、オ、よし／＼。』

およしは直ぐに抱いてやつた。そして揺上げながら、狭い家の中を彼方此方と歩きまはつた。幼児は剥げちよろけた木綿の袴を着せられて、お尻の辺が蒸されたやうに一種の臭気を発してゐた。

『丈夫さうな児ね。』

およしはお尻のむら／＼するのを気にしながら、誰に云ふともなく云つた。

『義兄さんに似たんでせう！』

お妙は幼児などにあまり好奇心を持たぬらしく、頻りに家の様子にばかり注意してゐた。

『妙ちゃんは今頃どんな、の？商売の方はだんだん景気が好いの？』

お道はお茶を掩れながら、いつもおなじ事を訊くのであつた。

『え、まあ相変らずよ。でも商売つてものは不思議なものね、どんな日だつて今日は暇で困るつて事がないんだもの。』

お妙は無造作に答へた。

『結構だね。妙ちゃんの服装を見たつて、そりや大抵分るがね。ほ

んとに豪気なもんだね。私など子供が大勢あるし、中々ね、お前さん達のやうに身綺麗にして遊びになど、到底出られつこないんだよ。』

お道は淋しさうに笑つて見せた。

『私だつて矢張り苦勞があるわ。』

お妙は姉の言葉を皮肉のやうに聞いたが、又語をついで、

『ちつとくらぬい、著物が著られたつて、それで幸福つて事が云はれやしないわ。』

と伏目になつた。

『でもいゝさ、お前さん達の苦勞は、中々派手な苦勞なんだから。芝居を見やうとか、流行がどうだとか云ふ、そんなんなら、苦勞にもなりやしないよ。』

そんな話をおよしは聞きながら、幼児を抱いて武雄の事を云ひ出さうか、どうしやうかなど、考へてゐた。

『ねえおよし、妙ちゃんは一人で景気が好き、うだから奢らせやうぢやないか？』

お道は人の悪い眼使ひをして、可笑しくもないのに、ゲラ／＼笑つてゐた。

八

お道は二人の妹を捉へて愚痴のありだけを並べた。世帯の苦勞や、子供の多い事や、亭主が怠ける事や、自分の体がだん／＼衰弱して

ゆくことや、そんな事を丸で人の所為なんぞのやうにしてこぼしぬいた。

お互に惚れ合つて、好き自由に夫婦になつた女の行末も、こんな惨目な結果に終るのだらうかと、お妙はやる瀬ないやうな、痛々しい感情に胸を鎖されるのであつた。

『此間からお前さん許へ行かうと思つてゐたんだが、今日は丁度来ておくれで幸ひだつたんだよ。』

およしの方を向いて、お道は急に改まつた。

『さう、どんな用事があつたの？』

神經の過敏なおよしは、又金の無心ではあるまいか、それとも自分に嫁づけと云ふ話かと、忽ちそんな事を考へた。

『実はね、今言つたやうな訳で、家も借金だらけで、もう二進も三進も動かないんだよ。でね、度々お前さんにこんな事を云はれる義理ぢやないんだけど、もう一度少しばかり融通してもらひたいんだよ。どうだらうね。』

お道は煙管を掃いて、嫌味な薄笑ひをしてゐた。

『ねえ、濟まないけれど、もう一遍だけ何とか心配しておくれよ。良人でもお前さんの事だけは、ほんとに心から心配してゐてね、此間からもちよつとした縁談もあるんだし、是非逢ひたいなんて、云つてゐたんだよ。ほんとに良人はお前さんの事を始終気にしてゐるのよ。』

およしは蛇にでも睨まれたやうに、体中の毛が粟立つて来た。僅

ばかりの金を貰つて出たのを好い事にして、これまでどれだけ融通させられたか知れない。いくら何でもあんまりだと思つた。

『さうね、私も最う今ぢや何もなくなつてしまつたもんだからね。それにしても縁談だけは断つて下さいな。お嫁入りなんて、商売ぢやあるまいし、何遍出来るもんですか？』

『どうしてさ。』

お道の声は異様に鋭かつた。

『でもよく考へて御覧なさいよ。此先一人でやつてゆくのも大変だらうからね。』

お妙は冷淡な顔をして、義理のやうに、口を添へてゐた。

『さうともさ。』

お道はおよしの運命は自分の手の中にある、とでも云さうな語調で、度強い声を出すのであつた。

『今に一人でもかうにもかうにもなくなつてから、相談をかける頃は、ねえおよし、誰も親切に聞いちやくれないよ。何でも人の云ふ事は肯くもんさね。私だつて、年の行かない時から、みんなの云ふ事さへ肯いてゐたら、今こんな醜態にもなつてゐなからうぢやないか。自業自得だと思つて諦めてはゐるけれどね。女は全くつまらないもんだよ。どうせ男に依らなきや立つてゆけないんだもの。』

感慨深い眼をして、お道はピリ／＼と唇をふるはした。

『なほゆつくり考へて見ますわ。』

およしは涙を拭き／＼微にさう云つてゐた。

『さうしてお金の方はお前さん、ほんとにもうちつともないのかい?』

『え、もうありやしませんわ。居喰ひですもの。裁縫なぞしてゐたつて細いもんですからね。』

『さうかね。』

お道は不快な顔をした。

『私も帰るわ。』

体をく、の字にまげて、片方の手を高くのばしながら、お妙は欠伸をしいく、懈さうにさう云つた。二人の話には耳をも貸さうとはしないのである。

およしは無態なお妙を憎らしげに睨めた。お道も焦々した心持を秘すやうにして、

『こんな話は妙ちやんには、ほんとに蒼蠅いだらうね。可愛相な姉さんだと思つたら、お前さんも少しは助けておくれよ。』

ときめつけるやうにして云つた。

『私なんか、自分一人さへ大変なんだもの、冗談ぢやないわ。』

同情のない言葉を残して、お妙は酒蛙々と先に帰つて行つた。

『今に見るが可い。ふん、あんなベタ／＼した服装なんかしやがつて、悪い疾病にでも罹るが落だらうに……』

お道はそんな悪態を吐いて空嘯いてゐた。およしは帰らうにかへられず、もち／＼として、ほんやり暮れ方の空をながめてゐた。

『出来さへすりや、私だつて姉さんの事ですもの、すぐにでもお届

けするんだけれどもね、何しろもう為様がないもんだから。』

弁訳がましく、気の毒さうに云つてゐた。

『何あに、もう可いよ。お前さん達に構つてなんか貰はなくつてももう可いよ。どうせ私は年の行かない時から、お前さん達とは別れてしまつたんだもの。今更こんな無心を云つたりするな、私の方が間違つてゐるんだよ。一人の姉がどんなに苦しまうと、自分さへ樂すりや、それで可いんだらうさね。もう帰つておくれよ。私はこれから一寝入りするんだから。』

不貞腐れた事を云つて、お道は真赤な顔をした。

『まあ姉さん、そんなに怒られては困つてしまふわね。』

およしは附穂なさうに、怖々してゐたが、姉の権幕がだん／＼激しくなるので帰つてしまはうと思つた。

『もう帰つておくれな。』

およしは来なきやよかつた、と後悔の念に駆られながらも、さて立つ機会を失つて、迷々してゐた。

街に涼しい風が渡つてゐた。派手な浴衣の女の美しい姿が、明るい灯の下に浮んで、人々が氣楽さうに散歩の足を運ぶ頃、およしは泣き腫らした眼を下に向けて、悄々と柳の蔭を歩いてゐた。自分一人は、最早や姉妹達からも放り出されたやうな使れない感じがして、此儘夜が明けなかつたら、暗に紛れて淵川に身を沈めてしまひたいなどと思つた。

(完)

〔注〕

- (1) 「職業作家」という選択―尾島菊子論―（新・フェミニズム批評の会編『明治女性文学論』翰林書房、二〇〇七・一一）
- (2) 「富山の女性文学の先駆者・小寺（尾島）菊子研究2―人と作品―」（金子幸代編集・解説『小寺菊子作品集3 随筆・評論』二〇一四・二、桂書房）所収。初出は『富山大学人文学部紀要』第52号（二〇一〇・二）。
- (3) ただし、劉氏所蔵の第40巻は完本ではなく、小説「親子」もごく一部の本文が確認できるのみである。
- (4) 「尾島菊子研究における「幼きころ」の意義―主題としての家族と「新しい女」―」（平成26年度國學院大學文学部共同研究報告書『台湾愛国婦人』の研究 本文篇・研究篇』研究代表者・高山実佐、二〇一五・二）
- (5) 坪谷のこの発言は平成25年度國學院大學大学院特定課題研究報告書『台湾愛国婦人』の研究 本文翻刻篇』（研究代表者・上田正行、二〇一四・二）に全文の翻刻がある。
- (6) このことについては、既に拙稿「新資料『台湾愛国婦人』第六十一巻―与謝野晶子と雑誌の関わりを中心に―」（『日本研究』第27号、二〇一四・五）において言及した。
- (7) 第60巻の目次・その他の内容については、拙稿「雑誌『台湾愛国婦人』の史的位位置―新資料・第六十巻を中心に―」（『日本研究』第22号、二〇〇九・五）を参照されたい。
- (8) 「富山の女性文学の先駆者・小寺（尾島）菊子研究3―メデイアとの攻防・「ふるさと」観の変遷―」（金子幸代編集・解説『小寺菊子作品集3 随筆・評論』二〇一四・二、桂書房）所収。初出は『富山大学人文学部紀要』第53号（二〇一〇・八）。
- 〔付記〕 本稿は、JSPS科研費JP17K02452の助成を受けた研究成果の一部である。
- 本稿を編むにあたり、貴重な資料の閲覧を許可して下さいました財団法人半線文教基金会台湾文化資料館館長・劉峰松氏、並びに国史館台湾文献館のご協力に深謝申し上げます。

Reprint and introduction of Kikuko Ojima's *Mosquito Swarm*:

A serial novel from *Taiwanese Patriotic Women*

Yuka Shimooka

This paper reprints the text from the novel *Mosquito Swarm* (1913) by Kikuko Ojima (1879-1956), and introduces its content and features. The publication in which *Mosquito Swarm* appeared, *Taiwanese Patriotic Women*, was published during the Japanese imperial rule in Taiwan, and is rarely found today. A complete set of issues has yet to be discovered. Thus, the contributions made by Kikuko Ojima have never been properly ascertained. This paper reveals that Ojima contributed at least 16 volumes of works to this magazine. The heroines of Ojima's novels often rebel against traditional familial systems. However, *Mosquito Swarm* establishes a heroine with completely opposite values, and is considered a literary work that illustrates the breadth in Ojima's writing.